
ふたり。

キイチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたり。

【Nコード】

N4040B

【作者名】

キイチ

【あらすじ】

毎日同じことばかり。朝起きて授業を受けて家に帰る。そんな毎日に嫌気がさした充は少しだけ寄り道してみた。そしてある場所で”先生”をみかける。――自分の存在を誰かに感じてほしい。ずっと”ひとり”だった充と先生。”ひとり”同士の”ふたり”が行き着く先は…

\$ Prologue \$

「進藤先生！教えてほしい問題があるんですけど…」

あんな風に見え透いた嘘になにか意味はあるんだろうか？

あたし頭悪いんですって周りの人に知らせるため？

勉強して偉いでしょって？

答えはどちらでもない。

- - : きつと、

”貴方に興味があるの”っていう遠回しな告白だ。

そう言つて駆け寄ってくる生徒の真意に少なからず気付いている先生は笑顔で彼女たちを迎え入れたりなんかして、

「ほら、充！行くよ！」

「え、あたし英語わかる」

「誰が勉強しに行くって言った？あんなのただの口実じゃない」

「やだよ。あたし進藤先生興味ないし」

きつと100人に聞けば95人くらいはかつこいいと言うかもしれない

ない。

でも興味がないのはしょうがない。

今年うちの学校に赴任してきた進藤一哉「しんどう いちや」先生は瞬く間に人気者の座を手のうちに入れた。

多分本気で付き合いたいと思って言い寄る人は殆どいないはずだけれど、きっと皆暇なんだ。

確かに高校生なんて暇だけど、あたしは正直そんなに暇じゃない。少なくとも憧れを掲げて先生を追いかけるほど、は。

\$ 1 s t C o n t a c t \$

目が覚めてから夜眠りにつくまでの大まかな行動ははっきりと覚えてる。

昨日も一昨日もその前も。

いつだってあたしの毎日は変わらなくて、

「充、意識飛んできますけど」

「ゆず。おはよ」

志堂寺充「しどうじ みつる」、17歳。別に偏差値の高い高校に通ってるわけでもなければ最低ランクの高校に通ってるわけでもない。

当たり障りのない高校に籍を置いて、ただなんとなく毎日を過ごしている。

これで部活にでも入っていようものなら少しは生活に波風もあったろうけど、生憎スポーツは得意とは程遠いレベルで。

だから放課後はまっすぐ家に帰って部屋で一眠りするくらい。

毎日、何の変わりもない日常で。

「だから先生に憧れでも持ちなつて、」
「やだ。人込みつて苦手だし、それに」

ああいう人は苦手。

そう言いかけて口を開くのをやめた。友達の桐島柚子「きりしま
ゆずこ」は間違いなく進藤先生信者だから。

充はどちらかというに進藤先生より片桐先生の方がまだいい。

片桐篤「かたぎり あつし」、生物の教師。黒髪眼鏡で年齢は進藤
先生と同じ歳だけどなんとというか華やかさが違う。

地味に地味に。

それが彼のモットーなのでは、と思うくらいに。
外見もなんだか頼りないし、きつと生徒からの信頼もあまりないと思
う。

そんな先生をいいと思ったのはある一瞬だった。
普段近づかない生物準備室に用事を頼まれて入ったとき。

窓際でタバコを口にくわえているのを見たときだった。

なんだか普段の先生とはまるで別人のような。
情けない片桐先生ではなくひとりの男で。

それは誰にも言っていないけれど。少し片桐に興味が沸いた瞬間だ

つ
た。

\$ 2nd Contact \$

「次しんちゃんの授業じゃない!？」

「んだね。英語かあ…」

しんちゃん、は進藤先生のかわいらしいあだ名。あたしは決して呼んだりはしないけど。

この時間になるとみんなやたら髪の毛だとか化粧に気合いが入る。きつとうれいだろうなあ、進藤先生は。

「ゆず、いま邪魔したら怒る？」

「多分、てか絶対」

女の友情なんて、所詮はこんなものだ。

男のためならなんだってやれる。多分すごいことだろうけど良いこともある、ってことに彼女たちは気付かないんだろうか。

たとえばあたしみたいなのはこの時間になるとつまはじきだし、ね。

チャイムがなれば彼女たちは今か今かとドアを見つめて。恋する女の子はかわいいけれど、時に報われないこともあったりする、かも。

例えば、今日のような自習になるとき。

「はい、授業はじめるぞ」

「ちょ…なんで片桐」

「進藤先生は急な出張で今日は自習」

「なんだ…」

「つか代わりが片桐ってのがありえない」

そんな非難すら気にしない片桐先生は課題をさっさと配布し終えて自分の仕事を始めた。ノートパソコンを開いて、教科書をめくりながらプリント作りだろうか？

配られたプリントに取り掛かりつつ、ちらりと片桐先生に目をやってみた。

「ゆず、」

「なに？」

「片桐先生嫌いなのか？」

「んー、何て言うか興味がないっていうの？好きとか嫌いとかいう興味がわからない」

興味、か。

\$ 3rd Contact \$

興味がない。

あたしが進藤先生に興味がないのと同じことか。それから両親のあたしへの感情も。

物心ついた日からあたしはいつだって一人だった。別に友達がいなかったわけじゃなかったけれどなんだか上手く心には入り込めないというか、上手く人になじめない。

人付き合いが下手だといったらそれまでだけど、両親と付き合いのが下手っていうのは人付き合いがどうかそんな次元の話じゃないと思う。

いつそのこと完璧な独りになりきれれば一番いいのかもしれないけれど独りになりきれるほど強くはないし。

「ちょっと充、話聞いてる？」

「ごめん、聞いてなかった。なに？」

「放課後、みんなでカラオケ行ってくて話。あんたもいく？」

「あー…やめとく。また合コンでしょ？」

「まあ。…充さ、彼氏とかほしいと思わないの？」

「思わなくてもないけど苦手なんだよね、合コンみたいなの」

「まあこっちとしてはラッキーなんだけどもさ」

じゃあね、なんてありきたりの言葉を選んで教室を出た。このまままっすぐ帰ってもいつもみたいに眠るだけなんだ。そう思ったらなんだか真っすぐ帰るのが酷くつまらなく思えて、片桐先生がいるはずの生物室を覗いて帰ることにした。

あわよくば煙草を吸う瞬間を拝めれば、

「志堂寺さん？ 桐島先生なら用事があるからって帰ったけど」

「…南先生」「用事があるなら明日出直したほうがいいわね」

「あ、はい」

なんだ。もう帰っちゃったんだ。だったら学校に残る意味もない。足早に学校を出て少しだけ寄り道して帰ることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4040b/>

ふたり。

2010年11月6日13時45分発行